
表死された二人

ユン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

表死された二人

【Nコード】

N8175Y

【作者名】

ユン

【あらすじ】

ある少年を見かけた少女。

少女は少年と友だちになりたいと願った。

そして…少年・少女の『NARUTO』での生活が…大きく変わっていく。

原作潰します！

ユン

始まり

これは『NARUTO』の世界のとある少女と少年のお話。

少女と少年は…噂の中で…懸命に…二人だけで頑張って行く…。

噂を流した人は…少女の肉親かそれとも…。

チート能力です…多分。

主人公は少女です…いや…二人です…。

原作潰しあります…。

一話一話が短いかも…多分。

一話一話を長くする努力をしていきたいので…頑張って書いていきます。

感想ご意見宜しくお願い致します！多分…『10.5』『20.

5』でお返しができると思います！

作者ユン

1 少年との出会い…そして。

少女「ねえ…なんであの子…避けられてるの？」

男「あの子？…ああ…あの子か…あの子については何も言えん」

少女「なんで？」

男「そういう決まりだ！」

少女「…私…あの子と…仲良くしたい！ダメ？お父さん？」

お父さんと呼ばれた男は少女の言葉を聞き、少女を殴った…いや…平手打ちをした。

父「ふざけんな！仲良くしたいだと！彼奴は…！」

父と呼ばれた男は何かに気づき、口を噤む。

父「…帰るぞ！…いの！」

少女は平手打ちされた頬を摩りながら父の後ろについて行った。

少女…いの…山中いの。

いののは父の後ろについて家に帰ると…母が娘の頬を見て驚いていた。

母「いの！誰にやられたの！」

いの「お父さん」

母「あなた！なんで…いのを！」

父「彼奴と仲良くしたいと言ったからだ！」

母「つな！」

いの「なんで…あの子と仲良くなったらダメなの！あの子が何かしたの！…あの子が！」

父・母「っ！？」

いの「あの子が何かしたの！教えてよ！教えてくれないのなら…言う事聞かないから！」

母「いの…あの子については…極秘とされているの…だから…言えないわ…いの…ごめんね…」

母はそう小さく言い、いのをなだめようと頭を撫でようとした。

いの「触らないで！…お父さんもお母さんも…大嫌い！」

いのは母の手を払いのけ、家を出ていった。

母「いの！」

父「…母さん…止めるな…好きにさせてやれ」

母「でも！」

いの「お父さんもお母さんも…なんで…あの子がおかしたの！…あの子は…私と同じくらいの子供じゃない！なのに…避けらるなんて…悲しすぎる！」

私は家から離れた場所で小さく叫んでいた。

少年「同情？」

後ろから突然声をかけられた。

振り向くと少年が立っていた。

いの「あ…君は…！ど、同情なんかじゃない！私は君と仲良くしたいって心から思った！」

少年「…本当に？」

いの「本当よ！」

少年「友だちになってくれる？」

いの「当たり前！君と友だちになって仲良くしたい！」

少年「ありがとうつてば！…あ…俺つてば…うずまき ナルト…宜しくつてば！」

いの「ナルト…私は…山中 いの！宜しく！ナルト！」

挨拶をして笑いあう二人を影で見ている者がいた。

？「ナルト…良かったのう…」

その者の名は…三代目 火影・猿飛ヒルゼン。

火影「誰かおらぬか？」

暗部「つは！火影様何か！」

火影「ナルトといのを此処に連れて来い」

暗部「え…は、はい！承知いたしました！」

暗部は火影の言葉を聞き、姿を消した。

その後、ナルトといのは暗部に連れられて火影の元へやって来た。
ナルト「火影のじーちゃん！どうしたんだってば？」

いの「あ、あの…何か？」

火影「何、お主たちにある提案をな…」

ナルト・いの「提案？」

火影「お主たち…二人だけで暮らしたりしてみんか？」

ナルト「え？」

いの「良いんですか？」

火影「お主たちが良いのならのお？」

ナルト「いのと二人だけで」

いの「私は…良いよ！ナルトと暮らしたい！」

火影「ナルトはどうじゃ？」

ナルト「いのと…暮らしたい！」

火影「決まりじゃのう」

そして二人だけで暮らす事に決めたナルトといの。
二人の住まいは…なんと…”死の森”だった。

2・二人＋の生活

火影の提案で二人だけで”死の森”へやって来たナルトといの。

ナルト「此処で暮らすんだな…いのと」

いの「うん…二人だけで」

ナルト「怖い？」

いの「ナルトと一緒にだから…平気」

ナルト「いの…俺もいのと一緒にだから…平気だ…」

ナルトと私は…”死の森”を歩いていた。

ナルト「いの…これからどうする？」

いの「取り敢えず…住処を探そうか…ねえ…其処の暗部さん！」

暗部「っ！？」

私は振り返り私たちを監視していた暗部に声をかけた。

暗部「…なんだ？」

私が声をかけた暗部は姿を出し、要件を聞く。

いの「”死の森”には住処になりそうな場所ってあるの？」

暗部「住処になりそうな場所…森の中央部に”死の森”を監視する場所ならある」

暗部はいのの問いに答える。

いの「ありがとうございます…じゃあ、其処に行こ！ナルト」

ナルト「ああ」

暗部「…」

私とナルトは暗部の人を置いてどんどんと”死の森”を歩いていった。

大分歩いたのか”死の森”に入って今、ある程度広い場所についた。

ナルト「…まだまだ先はありそうだな？」

いの「うん…此処らで食料を探さないとね？」

ナルト「暗部の兄ちゃん…いる？」

今度はナルトが暗部に話し掛ける。

暗部「…なんだ？」

いの「この辺に川とかあるの？」

暗部「…ある」

いの「何処に？」

暗部「…ついて来い」

私とナルトは暗部のお兄さんについて行つた。

ついて行くと…川底がある程度ある川がありました。

ナルト「いの…川で何するの？」

いの「ナルト…釣りでしょ…この場合」

ナルト「どうやって？」

いの「そうだなあ…あ！…ちよつと待つてて！」

いの「はそう言いその場を離れた。」

ナルト「…」

暗部「…」

私とその場を離れ…尖った石と綺麗に真つ直ぐ伸びた木をとつてきました。

そして、近くの木に巻きついてあつたツルを使い…槍の完成！

ナルト「いのつてば！すげーな！」

暗部「…」

いの「まあね」

その日、いのは魚を6匹捕まえた。

いの「はい、ナルト…暗部の兄ちゃん」

暗部「え…くれるのか？」

いの「うん、だって暗部の兄ちゃんがこの場所教えてくれたんだから、当たり前じゃないですか！」

暗部「当たり前…か。…ありがとう」

三人で食事をした後、暗部の兄ちゃんは…姿を消した。

いの（多分、火影様に報告かな）

そんな感じで”死の森”での生活が始まった。

3・火影と噂と提案

”死の森”にやってきて3日目になった頃、私とナルトの目の前に数名の暗部の姿が現れた。

ナルト「っな！暗部の兄ちゃんがいっぱい！」

いの「ナルト…落ち着いて…暗部さんたち…何か用ですか？」

？「ナルト、いの…驚かせたのう…」

ナルト・いの「あ！火影のじーちゃん！」

火影「どうじゃ…」死の森”の生活は？」

いの「はい！この暗部の兄ちゃんのお陰で…充実しています！」

火影「ほう…充実とな…それは良い事じゃ！」

ナルト「火影のじーちゃん？今日はどうしたんだってば？」

火影「なあに…お主らが元気にしているか気になってのう…」

いの「…遠眼鏡の術で見ているのかと…」

火影「っな！…いの…それは…何処で？」

いの「…禁則事項です！」

ナルト「いの…禁則事項ってなんだってば？」

いの「…秘密って言う意味だよ…ナルト」

ナルト「へえ…そんな言葉があるんだ！」

火影「話進めても良いか？」

ナルト「え？」

いの「…どうぞ」

そう言い木の根に腰掛ける火影といの・ナルト。

火影「実はのう…里の者が…お主らが死んだつと言うデマを流したのじゃ…」

ナルト「え？」

いの「…そうですか」

火影「ワシがその噂を聞いたのはつい今朝方じゃ…もう里の皆は噂

を聞いておる」

いの「では…そのまま宜しいのでは？」

火影「え…そのままで？」

いの「はい！だってその方がナルトの為にもなるのでは？」

ナルト「俺の為にも？」

いの「…父さんにナルトの事を聞いても極秘とか言っではいけないって言われていました…ナルトには何か秘密にしないといけない事があるんですね？」

火影「…まあ…間違いでは無いのう」

暗部「火影様…」

いの「それが何かは聞きません！…でも…ある提案を承諾して下さい！」

火影「ある提案？…なんじゃ？」

いの「はい！…一つ、今流れている噂はそのままで！…二つ、私とナルトに”死の森”で修行をさせる…3つ、6歳になったらアカデミーに入学させて下さい！」

いのは火影の目を真っ直ぐ見て言い放った。

火影「”死の森”で修行…アカデミーに入学…良かろう…しかし、アカデミーで死んでいない事がバレルぞ？」

いの「偽名を使います」

火影「偽名か…良いのか？」

ナルト「俺はイイつてばよ？」

いの「構いません！」

火影「どんな偽名にするかのう？」

ナルト「いの…決めてイイよ？」

いの「…ナルトは山守ヤマモリ 那路ナルで…私は…山守ヤマモリ 乃衣ノイと名乗ります。

ナルト「イイじゃん！カッコいいつてば！」

火影「良かろう…修行じゃが…二人だけとは…」

いの「暗部の兄ちゃん！宜しく願います！」

暗部「え？…ほ、火影様？」

暗部の兄ちゃんは火影のじーちゃんに助けを求めるが…

火影「ほう…それは良い！」

暗部「そんなぁ…」

いの「…ダメ？」

いのは首を傾げ暗部の兄ちゃんを見上げた。

暗部「う…」

火影「…観念せい」

暗部「…わ、分かりました…やります」

ナルト・いの「やった！」

そして、数名の暗部は姿を消し、火影のじーちゃんと暗部の兄ちゃんだけが残った。

4・偽名での生活

火影「では…自己紹介つといこうかの？」

そう言い暗部の兄ちゃんを見る火影のじーちゃん。

暗部「はい…那路…乃衣、俺の名ははたけ カカシだ…まあ…それ以外の事はこれから自分たちで…知ってくれ」

那路・乃衣「はい！カカシ兄ちゃん！」

二人は笑顔で答えた。

火影「じゃあワシも里へ帰るとするかろう」

那路・乃衣「えっー！」

火影「仕事があるからろう…また会いにくるから、それまで元気なの…」

那路「分かったつてば！」

乃衣「はい！」

そう言い火影のじーちゃんは姿を消した。

カカシ「んじゃあ…早速…修行したいか？」

乃衣「うん！お願いします！」

那路「うん！宜しくつてば！」

カカシ「んじゃあ…そうだなあ…チャクラコントロールでも…始めるか！」

那路・乃衣「はい！」

そう言いカカシ兄ちゃんは足にチャクラを集め、足だけで木を登っていった。

那路「おお！すげーつてば！」

乃衣「出来るかな？」

そう言っている間にカカシ兄ちゃんは5m上まで登り…

カカシ「まずは此処まで！徐々に高さをあげていこうか？」

那路「はい！…まず、足にチャクラを…そして…登る」
乃衣「…すーう…チャクラを足に…はぁー…うん…行こ」

那路は2mで落ちた。

乃衣は4mでバランスを崩した。

那路「け、結構…難しいってば！」

乃衣「まずは集中が必要かも…」

それから二人は別々の修行方法を行った。

那路はがむしゃらに…。

乃衣は瞑想し集中力をあげていった。

カカシ「それぞれ自分にあった修行方法だな…」

その二日後、なんと二人は15mまで登っていった。

カカシ「成長早！まあ…まだ3つ…俺も頑張らんとな」

それから半年…那路・乃衣は凄まじい程の早さで術などを覚えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8175y/>

表死された二人

2011年11月24日19時56分発行